

# 鉄穴内遺跡について

## 1 位置・立地

鉄穴内遺跡は島根県雲南市三刀屋町六重<sup>むえ</sup>に所在し、斐伊川の支流である飯石川上流域の急峻な丘陵南西斜面部に立地します。調査の面積は約3,840㎡です。

## 2 遺跡の性格

本調査では鍛冶工房<sup>かじこうぼう</sup>4軒以上のほか、加工段<sup>かこうだん</sup>7基、土坑<sup>どこう</sup>16基、たわみ（窪地）6か所を確認しました。また鍛冶工房やその周辺遺構、排滓場<sup>はいさいば</sup>から、鍛冶関係遺物や鉄器、土師器、須恵器<sup>すえき</sup>などが出土したことから、奈良時代後半から平安時代初め（8世紀後半～9世紀代）の鍛冶集落跡<sup>かじしゅうらく</sup>（鉄を加工し、鉄の道具をつくっていた集落）であることが判明しました。

## 3 主な遺構について

### ・鍛冶工房群（鍛冶工房1～4）

調査区の中央南部では鍛冶工房1・2、北西部では鍛冶工房3・4（炉3～5）を確認し、少なくとも鍛冶工房が4軒あることが分かりました。鍛冶工房は加工段（斜面を造成した平坦面<sup>かじら</sup>）に鍛冶炉が伴う構造です。鍛冶炉は今のところ5基見つかっています。

### ・炭窯1・2

炭窯1・2には多量の木炭が残り、壁際は弱い熱を受けた焼土が厚く堆積していました。これらの炭窯は土坑内に木を並べて火をつけ、土で覆うことで炭を作った遺構と考えられており、鍛冶に関連する可能性があります。

### ・排滓場（はいさいば）

鍛冶工房1・2の斜面下方からは、鉄製工具・フィゴの羽口・砥石・鉄滓（かす）などの鍛冶関連遺物や多量の鉄器が奈良時代後半～平安時代初めの土師器・須恵器とともに出土しており、工房からの廃棄物の捨て場と考えられます。

## 4 出土遺物

鍛冶関係遺物として、鉄鉗<sup>かなはし</sup>（ペンチ）2点、タガネ1点、鉄砧石<sup>かなとこいし</sup>1点・砥石、フィゴの羽口のほか、鍛冶炉の底に溜まった多量の鉄滓や鍛冶作業で生じる鍛造剥片や粒状滓、炉壁、燃料の木炭が出土しており、鍛冶の工具や内容がほぼ揃っていると言えます。出土した鉄鉗2点のうち1点は全長33cmを測り、ほぼ完形です。鉄鉗の出土例としては県内2例目です。また鉄器は鍛冶工具のほかに、巡方<sup>じゅんぼう</sup>（帯金具＝役人の位階を示すベルトの飾り金具）<sup>くわすま</sup>・鋏<sup>さき</sup>や鋤のU字形刃先・鎌・紡錘車・不定形な鉄器や欠損品があり、100点近く出土しています。なかでも注目されるのが鉄製巡方です。これは全国的にみると東日本に偏って出土するもので、中四国・九州地方での出土例としては本遺跡が初めてとなります。さらに鍛冶工房2からは土器内面に黒色有機物が付着した土師器・須恵器の灯明皿<sup>とうみょうざら</sup>が6点まとまって出土し、鍛冶との関連が注目されます。

## 5 遺跡の意義

今回の調査によって、奈良時代後半から平安時代初めにかけて鉄穴内遺跡で鍛冶集団が鉄素材の加工、鉄器製作を専門的に行っていたことが分かりました。また『出雲国風土記』にみえる当地域での古代鉄生産の一端が具体的に明らかになるものとして期待されます。